◉緣起に就いて

文學博士　關根正直

（左の一篇は先生が本年一月心理學通俗講話會に於て演述せられしものにて心理研究第三號に掲載せられたりしを特に先生に請ひて此に轉載することゝせり（編輯係）

緣起の意味とその種類

一月の講演であるから緣起の話をするやうにとの御注文によつて斯樣な題を掲げましたが、此の緣起といふ詞に二つの意味がある。其の一つは神社佛閣の緣起などといふ緣起で讀んで字の如く事物の緣つて起る所、即ち原始の義、元は佛典から出た熟語だといふ。『書言字考』には「創草之義」と釋してある。此の方は神佛の由來書といつてわかるが、今一つの緣起といふ詞は定義がチトむつかしい、わかつて居るやうで儘な解釋が出來ぬ。是れは世俗に「緣起がよい」「わるい」又「緣起を祝ふ」などゝいふ時の緣起で、前申した神社佛寺の緣起と申すのとは全く違ふ。勿論この緣起も、原始由來の意味がないのではない。矢張原（モト）の意味が一轉して、人の一生行く末又事業の成功を其の首（ハジメ）即ち起點に於て祝するを「緣起を祝ふ」と申したので、再轉しては『緣起』とばかりいつて、目出度い事嘉瑞とか吉兆とかいふ意味にも成つたのである。其の場合、後世は延喜と文字を書き替へても通じてゐる。

詞や文字の穿鑿よりは、一つ卑近な實例を擧げて說明致さうなら、去る十二月大晦日に東京では「晦日蕎麥（ミソカソバ）」といつて、此の日蕎麥を喰（タ）べぬ家は殆どあるまい。何故大晦日に蕎麥を喰べるかといふに、蕎麥は長く延びるもの故、身代の延びる（財產の增殖する）のを祝ふのである。全躰商家では大晦日に限らず毎月晦日に其の月の惣勘定（計算）をして、偖身代のます〳〵延びるやうにと、雇人にまで蕎麥を振舞つた、其の風がいつか一般に移つたので、是れが即ち緣起を祝ふ一例である。

又東京の風俗で、轉居する時「引起蕎麥」と稱して新宅の四隣へ配る事のあるも、矢張長く御交（オツキ）際（アヒ）の出來るやうにといつて、緣起を祝ふのである。

然るに大阪の人、西澤一鳳が著『皇都午睡』といふ隨筆に、江戸の引越蕎麥を笑つて評してゐる、それは、

宿替引越の時大阪では附木（ツケギ）を配るが、江戸では悉く蕎麥を配る、また奉公人が親判をもつて來る、即ち年期の約束が出來て、雇人の主家へ住み込む時、親元證人にも蕎麥を出す。目出度いにも悲しいにも蕎麥が出る、馴れてはをかしくないが始めは獨笑した。……

とある。是れは西澤が上方の人で江戸の緣起を祝ふ習慣を能く知らぬからである。そして「目度たいにつけ悲しいにつけ」と云つてゐるが、是れもツイ筆が廻り過ぎたのである。江戸がいかに蕎麥を好くからといつて、法事や葬禮に蕎麥を出す家があるものか。是れは全く西澤の思ひちがへであ

る。惣じて江戸、今の東京市内には、蕎麥やが多い。是れは中飯などの代用にもなつて、便利だからでもあるが元目出度い意味を喜ぶ所から繁昌するである。それから又西澤は大阪では附木を配るといつて、其れは何の意味だか知らぬやうであるが、附木を配るのも、矢張上方の緣起を祝ふ風俗である。附木は薄い板の先に硫黄が着いてゐる、昔は竹の先へもつけたもので之を唯「硫黄」とばかり稱してゐた。そこで此の附木を配るのは、先祝ふ(祝ふと硫黄と口語が同じであるから)といふ謎で矢張緣起を祝つてゐるのである。餘所から祝儀の赤飯などを貰ふ其の家器の重箱には、何處でも南天燭の葉を敷く。南天を難轉の語に響かせて、災難を轉ずる心だといふのも、緣起を祝ふのである。(但南天燭の葉は食毒を消す効ある故に用ひたのだともいふが、銅鏡の裏や手箱の模樣につけるのは矢張緣起だ)其の重箱を空けて中に附木を入れて返すも「先祝ふ」といふ心の緣起である。(序に申すこの附木を入れる場合、重箱なり盆なりに、紙を入れて返す事は、返し引出物といつて鎌倉時代から行はれ來つた遺風で、緣起の意味ではない)。

又德川時代に、女子が御いはひと假名でかく場合には、「いわひ」とわの假名を書いて、はの字を嫌つたといふが、是れもいはひでは、亡者の位牌と同じ詞に聞えるのを、緣起がわるいといつて忌んだのだ。「いはひ」では緣起がわるいから、假名ちがひでも、態と「いわひ」と書くといふのが緣起を祝ふ事になるのである。斯樣に蕎麥や附木を配る事、南天の事、「いわひ」と書く例などを分類して見ると、凡そ五ヶ條ほどに成るかと思ひます。

(一) 支那でいふ瑞鳥嘉木の類、めでたい物と定まつたものによつて祝ふ事、是れは畢竟支那の眞似である。

(二) 時にとり物によつて、めでたい意義に聞える詞を以て祝ふ事。是れは日本の創意、或は支那の例を應用したのもある。以下は皆日本の創意或は應用發明ともいふべきものである。

(三) 希望の意を表はして事物にめでたい名をつけ、又は服裝器具等にも其の象を付けて祝ふ事。

(四) 祝儀のために不吉な例を避ける事。

(五) 不吉な詞を目出度い詞に云ひかへて祝ふ事。

一、支那の眞似から起つた緣起

まづ第一の支那の眞似から申しますと、孝德天皇の御世に、穴門(今の長門)國に白雉が出たといつて、之を國司から朝廷に獻上した。朝廷では外國の歸化の臣や、僧侶に諮問して、皆嘉瑞吉兆で候ふといふ答を得て、年號を白雉と改め、嚴めしい儀式が行はれた、是れが日本に於て、緣起を祝つた始であらう。それから天武天皇の時に、朱鳥と改元せられ、その後慶雲だの靈龜だのと改元されたのも、皆同じ例で、全く支那に於て斯樣なことをした、其の例にならつたに外ならぬ、奈良時代には餘程支那思想が這入つて來たが、支那思想といふ中でも、專ら彼邦の俗間に行はれた道家の說

陰陽五行説を信仰した。無闇に縁起を祝ふ、俗にいふ御弊をかつぐ事は、全く支那の風を受けたのである。支那で目出度い物だといへば、唯その説を丸呑して、目出たい事ときめてしまつた。例へば今も流行の廢らない鶴、龜、松、竹、梅の樣なものは、皆もとは支那の御弊かつぎが言ひ出した事です。まづ「鶴千歳極二其遊一」だの「龜齡過二萬年一」だのといふことは、『淮南子』や『廣五行記』などといふ本を始め『文選』などの中にも長壽の動物だとなつてゐる、松竹梅を歳寒の三友といつた事は『月令廣起』に見えるのが初だといふが、松壽の千年を當時の人が歌によんだのは、大伴家持の詠で『萬葉集』にある。

茂岡に神さび立ちて榮えたる、千世まつの木の年の知らなく。

平安時代に入つては非常な流行である。『古今集』以下の歌集には、鶴龜松竹は多くの場合めでたいものの例となつて、縁起を祝ふ道具につかはれてゐる。

鶴龜も千歳の後は知らなくに、あかぬ心にまかせはててん。

松の苔千歳をかねて生ひしげれ、鶴のかひこの巣とも見るべく。

萬代に千歳を重ねて見ゆる哉、龜の岡なる松のみどりに。

萬代をまつにぞ君を祝ひつる、千歳の蔭にすまんと思へば。

君が爲移して植うる呉竹に、千代もこもれる心地こそすれ。

色かへぬ松と竹との末のよを、いづれ久しと君のみぞ見む。

春くれば宿にまづ咲く梅の花、君か千とせのかざしとぞ見る。

又『平家物語』にある白柏子祇王が今樣にも

蓬萊山には千歳ふる、萬歳千秋重なれり、松の枝には鶴すくひ、巖の上には龜遊ぶ。

佛御前か始めて清盛に見えた時

君を始めて見る時は、千代も經ぬべし姫小松。

御前の池なる龜岡に、鶴こそむれ居て遊ぶなれ。

と謠つた事は誰れも知る通り、足利時代に出來た謠曲の中にも『鶴龜』といふがあり、松も謠曲に『高砂』と作られて祝ひの能樂と極つて居る。今日でも祝の歌といふと、矢張鶴龜や竹松をかつぎ出す。千年も前から目出たいものと成り來つて、今日に至るまで廢らない。是れだけでも目出たいに相違ない。

此外平安朝時代には『莊子』の「大椿八千歳」の故事をとつて。

君が代は限りもあらじ濱つばき、再び色は改まるとも。

君が世は白玉椿八千代とも、何にかぞへん限りなければ。

この故事は朗詠にも作られてゐる。又西王母の故事を

三千歳になるてふ桃のことしより、花さく春にあひにける哉。

こんな風に、支那で目度いといつたものは其の儘もつて來て祝ふ。言葉に云ひ出して祝ふばかりでない、品物にもつける。即ち衣服の織紋にも中々多い。至尊の御服には桐竹鳳麟の象を織り込む鳳凰麒麟、支那では無上に貴いものだ。上皇樣の御服には、菊の池紋がついてゐる。菊も仙人の愛する花だといつて、長壽の兆として祝ふ。此の外公卿宮嬪の服池に、雲鶴だの龜甲だの松喰鶴や松唐草、裏梅、幸菱などの織文を用ひるのは、是れ亦支那風の緣起を祝つたのであるが、今も祝儀の服の縫や染にも用ゐてゐる。そればかりでない、松や竹や實物を持つて來て、正月の御祝ひにさへしてゐます。

偖正月門に松を立てる風はいつ頃からかといふに平安朝時代のやゝ末頃から起つた事で、元は祝意を表する意味はなかつた樣である。延久時代の『本朝無題詩』に惟宗孝言が詩を載せて其の自註に「近來世俗皆以レ松挿二門戸一而余以二賢木一換レ之」とあるが、松ならば千歳の壽を保つ嘉木であるから、祝にもなるが、榊では何の意味もなさぬ。其の上後世でも田舍では松の代りに樒を立てる所もあり、松と榊を交せて立てる所もあると、種々の書にある。仍て藤井高尙といふ學者は「上古の神祭の遺風だ」といつた。それは吾が國固有の風で、松や榊の類の常磐木を、庭に立てて之を神籬（ヒモロギ）（日室木の意）といつて神靈の宿る所として祭つた所から來つたのだといふのである。いかにも

『夫木集』にある西行上人の歌にも、

注連かけて立てたる宿の松に來て、春の戸あくる鶯の聲。

とあつて、古くから門松には注連繩をを張つた所を見ると、唯祝意を表する裝飾ではなくて初めは祭祀のために相違ない。尤も唐朝の俗に正月元日門戸を祭つた事が支那の書物にあるから其の風も移つて來て、固有の神籬（ヒモロギ）の祭事と一つになつて、門前へ松なり榊なりを立て、注連繩などもかけたのであらう。之を後に松飾といつて、門の裝飾のやうに心得た事に就いて私が思ふには、平安朝時代に、行幸などのある時、道筋の穢ない所、陋屋の見苦しいのを隱すために、生木の松や竹を切つて來て、一面に立て並べた事が、當時の記錄にも年中行事の繪などにも見える、是れが又神籬や門戸を祭る風と一つになつて、年の始めに門前を美しく飾る事になつたのであらう。既にに平安朝末の人で、俊惠といふ法師の歌に。

春にあへる此門松を分け來つつ、我も千代へん内に入りぬる。

又後德大寺左大臣の歳暮の歌にも

年くれて今ぞ深山をいたすなる、かねて祝ひの賤の門松。

などとなる。分け來つつといひ深山をいたすといふ詞を吟味するに、近世のやうに、わづかに門前に二本ばかり立てたものとは思はれない。今より遙に多く、眞に深山の樣に茂く立並べて、陋屋

の見苦しいのを隠したのであらうと思はれる。是れは門松の來歴を考へて申したのですが、講釋が長くなつて御迷惑でした。兎に角斯樣な由緒のある門松が、いつか千歳の松などゝいふ所から、祝意を表した物の樣に思はれ、昔の學者の中でも松は衆木の長といひ、常盤木で其の葉を變へず、風霜に萎まぬ木だから、年始の祝に用ひるのだとか、後には竹をも立て添へて、竹も仙人の愛するものだとか、勝手な講釋を付けて、今では立派に緣起を祝ふ一つに成つてゐる。それ故是れは支那で長壽の植物だといはれてゐる松竹を、日本で年始の祝儀に應用したのだと申すのです。それら正月初子の日に、野邊に出て小松を引く遊びも行はれた。是れも松にふれて千年の壽にあやかる爲だといひ、七日に若菜を摘んで之を服すれば、萬病を除くといひ、春の野山に菜の色や松葉の樣な青い色を見るのが、陽氣を受けて緣起がよいといふ樣な、皆支那の眞似をしたものだ。小松を引く事は今絶えたが、若菜の方は、七種菜の粥を食べる風俗に遺つてをります。こんな風俗は、大抵平安朝時代からですが、同じ七日に白馬を覽るのも緣起がよいといふので、昔はこの日廿一疋の白馬を引き出して、天子樣の御目通りを過ぎる、中々の儀式があつた。是れも松葉や若菜と同じ樣に青い色を尙ぶので、馬は陽の獸である、青は春の色で、之を見れば年中の邪氣をさり、災厄を除くのだといふ。眞青な馬といつてはないから據なく稍色の近い白馬を引き出したのです。これも支那がもとで、日本に行はれた事も中々古い。『萬葉集』に大伴家持

水鳥の鴨の羽色の靑馬を、けふ見る人は限りなしといふ。

千年から前の事ですが、德川時代に至つても春駒は「夢に見てさへ吉いとや申す」と、俗曲の長唄にもある位です。支那の眞似をした緣起はまだ澤山ありますが、略しまして、第二の日本で創意した方に移りませう。

二　めでたい詞に聞える物を以て祝つた事

時節柄ゆえ正月の祝儀の事から申さう。然し載餅の式は古い事ではあり、上流に限つた事だからさし措きます。先づ一般の正月の餅は古來我が邦では、祖先を尊崇する風が盛に行はれたので、是れも亦元は祖先の祭祀に供へたのであらうといふ。之に附屬する品物は悉く日本流の名詮、即ち名稱言葉の祝意ある物を集めてゐる、といふのは、御供餅の下に敷く裏白といふ山草がある。これは深山にあつて霜雪にも萎まぬ物である所が、既にめでたい。其の上漢名を齒朶といふ、齒は齡とよむ。朶は枝である。枝は永く延びるもの故、命長く延びて茂るといふ義を取つたのだと云ひ傳へる。又ダイ〳〵とユヅリハとは親子代々讓り受けて、子孫繁榮の義となり、藪カウジは古名「山立花」といふ。例の冬も枯れずに葉も茂り、實をむすぶを祝ふといふ。ホンダハラは「神馬草」とかく、年德神の馬を飼ふといふ義だとも、又穗俵といふ詞の意にとつて、稻の穗の俵は豐年の祝意だともこじつけてゐる。小松は前申した通り千歳の壽を祝し海老に野老（トコロと云）は、共に老の字

に肖かる樣に用ひると、サモ物體らしく講釋してゐる本がある。

それから雜煮餅を食べる事に就いても、餅の異名を齒固とついて、之を食へば齒の根が固まるといふ。齒は齡と通じ、ヨハヒとも訓む。齡を堅める、即ち堅固息災で長命する祝だといふ。又共に食べる物にも、それ〳〵理屈を附けて、大根は身代(家祿資産の義)の大きに根の太く張るを祝し、菜は前申した若菜の青きを尙んだのであらうが、後世は名も揚る(菜も食る)と云ふ祝、芋は位も上る(芋食る)といふ意だなどとも附會され、又鰊の子を數ふるといつて、子孫の繁殖一族の繁昌を祝ひ、鮮(ゴマメ)を御健全の義にとる類、皆最初申した附木を「先祝ふ」の名詮にしたのと同じ例で、全く日本發明の緣起である。

正月は年の首であるから、どうしても緣起が多いですが、かう極つた歲時の祝儀の外にも前の樣な例が幾らもある。武士の勢力を張つた鎌倉時代からはいろ〳〵武家でも緣起を祝つた。其の一二をいへば、出陣の時祝盃をあげるに、肴には打蚫と堅栗と昆布とを三方臺に載せて出す。打つて勝つてよろ昆布といふ詞に寄せて、祝ふのである。所が勝つて還つた凱旋の祝ひには、打蚫を熨斗蚫と替へて出す。ノシは「延し」で、勝つて「威を伸す」といふ意だと云ひ傳へてゐる。食物ばかりではない。兵具調度の類にまで、名詮を尙んでゐる、例へば昔の戰に大切な武器であつた矢の羽を、鷲の石打といふ羽で作ぐ。石打はイシク(善)ウツ(討)といふ義をとつて、大將の矢と極めてゐる。又

箙には多く蜻蛉の象を附けてあるが、これも蜻蛉の異名を「勝蟲」といふからである。鎧の下に着る直垂には、褌といつて、播磨の國から產する濃い藍染の布を用ひる。關東武士などは、手近い所の上總の望陀木綿でよさそうな物を、矢張カチ(勝)といふ詞を喜んで、着たのである。又食物の事になりますが『徒然草』に鎌倉の海でとれる堅魚は、彼の邊では非常に賞翫される、同地方の老人の談に、これは近來の流行で、人の膳にも上る樣になつたは、妙な事だと、語つた一話が出てゐます。私の考へるに、是れも恐らく鎌倉武士の間に「勝男」といふ名詮を喜ばれて、上流の士まで賞翫したのであらう。所が兼好は都の僧なり、老人も當時流行の理由に想ひ到らずして、唯不思議に感じたのではあるまいかと思ふ、丁度德川時代に、何につけても祝ひに「鰹節」を用ひたのも「勝武士」と聞えるからだといふ。今も其の風は存してゐるが、意味はさつぱり分からなくなつた。又民間で祝ひの膳には、必ず鯛をつける。すべて魚は上つても目を閉ぢぬ。鯛の目玉は殊に大きく出てゐる。仍て之を目出鯛と申すのです。

三　希望要求の意を表して事物にめでたい名をつけなどして祝ふ例

子供の名に「長松」「鶴太郎」「お龜」「お千代」などゝ付ける事も、長命する樣にと望んで、緣起を祝つたのであらう。男兒の祝衣に翁格子を染める。翁といふ緣起です。又男女に限らず、鶴龜松竹梅をつけるも、考へて見れば、もとは長壽とか幸運とかを願つて附けたのであらう。此の外末廣

といふ所から、扇の模様を染め縫ひにし、福邊といふから、瓢簞も縁起がよい（フクベは酒を盛る器として脹瓮の義だと『和訓栞』にある）。又洒落た人などは、蕗の葉をかいて富貴と祝ふ例もある。昔江戸の富豪奈良茂の妻女が、服裝に華美を好んで、黒綸子に南天燭の總縫をし、其の實として珊瑚珠の五分玉を幾個となく縫ひ付けたといふ話があるが、之れも矢張難轉の心から出て、遂にこんな豪奢な風になつた事と思はれる。是等は希望といつても消極的であるが、モット積極的なのもある。元祿の頃の任俠寛濶の徒が、斧（ヨキ）と琴と菊の花との模様を衣服に染めて「善キコトヲ聞ク」だといへば、これに反對して鎌の繪と輪とぬの字とをかいて、そんな事にコチャ「構はぬ」といつた洒落などは、露骨だけれど奇拔で、いかにも元祿氣質が顯はれて面白い。又一富士二鷹三茄子の繪を衣服につけた話もある、是れは駿河國で徳川家にとつて吉例であるとも、又駿河國の名物を集めたのだといふ説もあるが、兎に角夢に見ると縁起がよいといつて手拭布などにも染め出した時代があつた。故事附けかも知らぬが、富士は高大を喜び、鷹は「打チ抓ミ取ル」といふ義、茄子は「爲ス成ル」の謎で、爲す事の成就する意に祝したのだといふ。かう聞いて見ればチト慾張つた縁起である。イヤ慾張つたのでは、酉の町の熊手でせう。鳥は大鷲神社といふから、「鷲抓みにとつて熊手で掻き込む」といふのだ。かうなつては洒落が下品で卑しくなる。

それから昔豆腐に紅葉の印を付けて賣る。こうえう（買う樣）といふ意だとの説があり、又毛拔鮨といふのも、「能ク喰フ」といふ謎である。毛拔は兩端がよく食ひあふのでよいのだ。食ひ違つては髯が拔けぬ。毛拔鮨はお客がよくくふ鮨で、澤山賣れる縁起だといふ。希望要求の意を表した縁起の話は是位にして。次は、

四　不吉な事を避ける例

すべて物を忌んだり、縁起を祝ふ風は、市井土民の間ばかりでない。前述の通り、公卿も武家も同樣である。足利時代の故實書に移轉の祝に赤色を禁ず。緋（火）色を避けるのである。婚禮の席に列する者は、猿毛の馬に乘るな。猿皮の靫を付けるなと誡めてある。猿が「去ル」と聞えるのを忌むのだ。又武家で男兒の祝には「截斑の矢羽を進物するな」ともある。武士に切るといふは不縁起である、それ故香の物を三片盛らぬ。「剛の者身切」になるから。一片もわるい、人斬になる。泰平の世に武士が人を斬り身を斬られるは、不吉である、又新しく刀劍を拵へたり、刀身を磨がせたら、豆腐の殼（上品な女房詞で卯の花といふ）で汁を調じて祝をする、豆腐殼の異名を「キラズ」といふ。不ノ斬となるのを喜ぶのである。尙又をかしいのは、武士が祝儀の席で食事をする時「向う皿の肴には箸はつけても、皿に手を附けるな」と誡める。皿に爪がのると、血といふ字になるからだ。祝儀の席に「血」の出るのは縁起がわるいといふ。何處の閑人が考へた事か、今の世には可笑しい事ばかりですが、是れ皆武家に行はれた縁起です。徳川時代に町火消の組合が「いろは四十何組」かあつ

た。「い組」「ろ組」を段々に分けたが、其の中で「ひ組」と「へ組」はない。火消に又ひ(火)は禁物だ。「へ組」是れは縁起の方ではない。發音が尾籠に聞えるからです。是れから見ると、今區内西片町十番地に「への部」といふ札があるのは、學者町といふ所に甚以て不作法だ。

それから又四といふ音、死に通ずるからといつて忌む事は、落語にさへある位ですが、是れも古い。婚禮後三日目に、餅を調じて祝ふ事は、『源氏物語』にもありますが、これは故實家の説によると、陰陽の神を祭るためだとあつて、陽(男)神に夫婦の分二杯、陰(女)神にも夫婦の分二杯、合せて四杯であるが、四を忌む、數詞の奇數は陽で、偶數は陰であるから、二二といつても縁起がよくない。『源氏物語』に光ル君が紫ノ上と結婚して三日目の餅を、家臣の惟光に誂へる時。三つが一つに製して來れと命ずる事があつて、昔は之を秘訣としたものだか、全く前申す四杯といふを忌んで、三つが一つといつたのであると、説いた學者がある。『源語』の時代は知らぬが、鎌倉時代には盛んに四の字を嫌つた事が『沙石集』に見えてゐる。今も電話の四百四十四番は、賣買の直が安いといふ。

四十二の親が生んだ子、また四十二の二歳兒は、シニともシシともなるから、一旦捨てゝ更に拾つて育てるといふ縁起も中々古い事で、近松子の『鑓權(ヤリノゴンザカサチカタビラ)三重帷子』といふ淨瑠璃に、鳥取の藩士朝香市之進が二女を、お捨と名づけたは、四十二の子であつたからと、祖母の述懐する所がある。捨てるのが、死ぬべき子の縁起を祝ふので、これは芝居であるが、當時は武士にも矢張こんな風俗の行はれた事が知れる。子育の祝で尚可笑しいのは、生れた子が幾人も死んだ後、又兒の生れた時は胞(エナ)衣と一所に製(コノシロ)といふ魚を、地中に埋めると、其の兒が育つといふ。製は「子代(コノシロ)」となるから、死ぬべき赤兒の身代りだといふに至つては、能くもこじつけたものだと思はれる。

五　不吉な詞をめでたい詞にいひ替へて祝ふ例

蘆はアシ(惡)と聞えるから、「ヨシ」(善)といひ替る。梨はナシ(無)になるから、反對の「アリ(在)ノ實」といひ替へる例ですが、中古の記錄には、「病苦に依つて不參」する旨を斷るに、「歡樂によつて」と書く。これもわるい詞をめでたい詞に代へていふのである。昔公卿さんの正服した時に把つ笏(シャク)といふ物があつた。笏は音「コツ」であるに、シャクと稱へた。「コツ」では「骨(コツ)」と同語になるのを、縁起がわるいとしたのである。之を「シャク」と稱へるは、昔の笏の長さは、丁度物指の樣であつたから、尺の音字を借りたのだとも、又位爵ある者の把つたものだから、爵(シャク)と稱へるのだとも説く人がある。又この笏を飛彈の位山の櫟(イチヒ)の木で造る。「一位」と聞える縁起をいふのである。横笛も字の通り「ワウテキ」と云つては「王敵」と同語に聞えるから、近い音を取つて「エウテウ」と稱へ替へ、文字もめでたい字面を取つて、「永長」と記錄にはかいてゐる。公卿さんは半女性的だからこんなに御幣をかつぐのかと思へば、髭むしやくしやな益荒猛夫(マスラタケヲ)も同じことだ。武士が戰場に於て、味方不利にして逃げる事を「延びる」といふ。又退去することを「開く」といふ類、い

ろ〳〵ある。今も退去する事を「お開きに致す」などと婚禮の席では云ふことになつて殘つてゐる。皆さんも御存知の通りです。こんな昔の例がのこつて、客商賣をする家では「擂り鉢」を「當り鉢」「硯箱」を「當り箱」などといつてゐる。「スル」といふ詞は「磨り潰す」などゝいつて、身上(家產)を滅却する意に聞えるから、當るといふ縁起の詞に替へてゐるので、古今人情に變りのない事が思はれます。まだありますが、餘りうるさいから一つ飛び離れた祝ひ直しの例を申さう。

寛政の昔江戸數寄屋橋邊に往んでゐた武家に、誰れか遺恨を含むものがあつて、或る夜中、藁人形にその武家の名をかいて、眼に大きな釘を打つて、門前に捨てた、武家の主人大に神經を惱まして、今にも眼の潰れるやうな氣がしたが、フト思ひついて、其頃太田南畝(蜀山人とも四方赤良ともいつた人御存の通)は狂歌に名高く、頓智に秀て洒落な快活な人であつた。主人も別懇の間柄であつたを幸ひ、此の人の狂歌で祝ひ直して貰はうと思つて、南畝の家へ出向いて、委細を談じて狂歌を請うた。スルト南畝が、

呪ふとて眼に大釘をうつとても、耳でなければ聞く筈もなし

と祝つてくれた。喜んで此の狂歌をかいて門の外へ捨てておいた。所が翌晩は藁人形の耳へ釘をうつて捨てた。主人は又心配して南畝の所へ行つて訴へた。南畝はまたかうよんだ。

大釘を耳へ打つたら耳つぶれ、聾になつて猶きかぬなり

恨んだ奴は根氣の強い男と見えて、此の後に又藁人形の總體へ釘を打つて捨てた。此方もまけずに又南畝にたのんだ。そこで南畝が今度は、

身うち皆釘をうつても何のきかう、糠に縁ある藁人形ぢや

此の後は遂に藁人形を捨てなかつたといふ。南畝翁には此類の談が澤山ある。又曾呂利新左衞門の狂歌として同じ樣な話を傳へるゐるが、曾呂利の狂歌は後世の僞託が多いから申しませぬ。餘り時を費やしまして、聽衆諸君に御退屈をさせましたからもう止ませう。

* * * * * * * *

以上は何の創見もなく研究でもない、唯の材料、骨董店の樣に古い物を並べたばかり、而も全く未成品で、何の用にも立たない事を、長々とお話して、返す〳〵御退屈をさせました。然し長いといひ延びるといふのは蕎麥ではないが、矢張り縁起のよい詞ですから、是れで諸君をお祝ひ申して、私はこの席をお開きに致します。

白川院御製

麓の面は月もらぬまでなりにけり
槍になつのかげしげりつゝ